

治山事業による崩壊地の復旧 ～現地にあった工法を選択する～



「木製法枠工」施工地

上の写真は2005年に施工された治山施設の10年程たった現在の状況です。

この場所は山腹斜面が台風により崩壊し、その拡大が懸念された箇所でした。復旧のために考えたのは佐久地域で豊かな森林を形成しているカラマツ材を使用することでした。それは適切に設置されるならば、コンクリートの強度に匹敵し、かつ、加工が容易という利点があります。この場所の土壌は強アルカリ性で、植物が育ちにくいという性質を持っていました。そのため、法枠内には植物の生育に適した土壌を詰め、緑化を可能にしました。さらに早期緑化を図るためにカシフを植栽しました。1本1本のカシフを覆っているのは「ツリーシールド」といい、獣の被害から苗木を守るために設置しているものです。

木材だからそのうち腐ってしまうのではないかと思われませんが、佐久地域産のカラマツは腐りにくく、耐久性もトップクラスと全国的に高い評価を頂いています。

この写真のように施工から10年も経過すれば、植栽したカシフがしっかりと根付き、草木が生え、土砂の移動が抑えられることで安定した「山」へ復旧していきます。

治山事業は山の持つ水源の涵養機能を高めたり、山地災害の防止の目的のために森林を維持・造成することに努めています。そのために、それぞれの箇所の立地環境、樹種特性、森林の管理を総合的に判断し、現地に合った工法を選定して事業を実施しています。